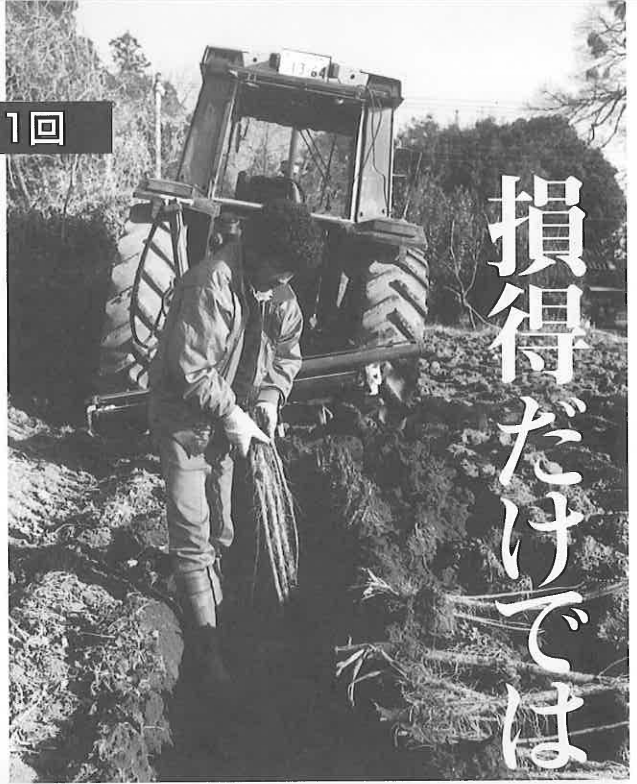


損得だけでは 頑張れないし先も見えない



一時は何10人ものアルバイトを使ってゴボウの収穫作業を請け負っていたこともあるが、現在の中心は高品質ゴボウの生産だ



石川治男さん
(50歳)
〒307
茨城県結城市
上山川1622
☎0296-35-0149



農協の機械専門職を経て農業と農作業請負業を営み、大規模経営の高品質ゴボウ生産者としても有名。農業機械、土壌肥料や作物栽培の知識を持つだけでなく農業経営者ならではの実践的な知恵やその人柄から、各地の農家や企業との関係を深いものにさせている。

農協の農機扱いというのは、組合員であるお客さんを商系に取られているというのが通り相場。だが、石川さんが担当するようになって、単なる組合員というだけでなく賃耕屋をやるようなやり手の農家を、すべて農協のお客にしてしまったのだ。

石川さんは子供時代から、ゼロ戦の整備兵をしていたという父親ゆずりの機械好きで、鍛冶屋をしていた叔父の仕事を一日見ているも飽きなかった。父親の自転車の後ろに乗って、父親が農機具屋が直せないマグネットの故障を直すのを見て誇らしい気持ちになったりもしていた。そんな子供だから、機械だけでなく電気関連のことも見よう見真似で覚えていたのだろう。

石川さんが賃耕の仕事始めたのも、農機担当になったのがきっかけだった。機械の整備技術レベルをあげるのに、もっと大型トラクタに乗りたいたいと思った。使ってみなければ機械は分らないからだ。でも、当時大きなトラクタを持っていない人にとって、それは宝物。なかなか触らせてくれない。

もつとも、そんな職業上の必要もあるとはいいいながら、実は石川さん自身が「ともかく大きなトラクタに乗りたいたい心で、買っちゃった」のだ。まさに子供っぽい願望である。初めて

当時、農業はまだ父の仕事だった。でも石川治男さんは、二十歳になるかならないかの頃から、週のうち数日は完全な徹夜でトラクタに乗っていた。賃耕である。朝は2時、3時から6時まで作業して、飯をかきこんで農協に出勤する。昼間も人を頼んで仕事をさせて、夕方、家に帰ると早飯を食べて11、12時まで畑にいたというのが当たりまえだった。

昭和40年代後半の数年間には基盤整備の最盛期で、大きなトラクタを持っていて、その気にさえなれば賃耕の仕事はいくらでもあった。最初は、基盤整備工事の仕上げ作業としてのロータリとプラウ作業だった。

その後、畑作農家からゴボウの空掘りを請け負うようにもなり、農協を辞めて専業となる。

さらに現在では、賃耕主体の経営から自分でゴボウを中心とする野菜栽培が経営の主体であり、「袖ごぼう」という石川さんの個人ブランドで市場の高い評価を受けるようになっていく。ゴボウの輪作につくるバレイシヨやニンジン、そしてハクサイ、ダイコン等々。圃場の条件が良ければ栃木、宮城などの100km以上も離れた畑に出作りすることもある。

「自分」を見つけた農協職員時代

10代の終わりから35歳位までの間の、徹夜仕事も厭わぬ賃耕と農協職員との兼業農家時代の経験こそが、石川さんのなかで「何か」を育てていった。

農機のセールスと整備を仕事とする農協職員であること、賃耕屋であること、

そして農家の息子でもあることのすべてが石川さんの今を育てた。

「面白かったんだね。機械が好き、機械バカというより気違いなんだよね、きっと」と笑う石川さん。

農協での石川さんの最初の仕事は有線放送の担当だった。当時は誰も電気のことから分らず、まだ17、8歳の坊やながら手元が器用で見よう見真似でも電気知識のある石川さんは、重宝がられ、あてにもされた。独学で電気の勉強もした。そのことが農業機械の知識も深めることにもなった。

次いで農機のセールスと整備を担当した。それは石川さんにとって、まさに始まり役の職場だった。石川さんはその時生きるべき「自分」を見つけたのかもしれない。

買ったのはMF165とロータリとプラウだった。しかし、買えばお金を払わねばならない。だとしたら夜は寝ずとも仕事を請負うしかなかった。もちろん、賃耕が成り立つ目論見はあったし、実際、仕事はいくらでもあった。

石川さんは、農協で農機の技術サービスをして何人もの貸耕屋さんの機械を整備しているうちに、機械のどこが壊れ、何が問題であるかも良く分かった。また、使い次第で機械の耐久性も変わることよく見えた。これも、兼業していたから分かることだった。

それ以外にも農協に勤めていて、なぜ農協が農家に捨てられるのか、農協や農家のやり方と本気で商売する人との違いも見えた。セールスとして機械を沢山売ればメーカーの人間も注目するし、石川さん自身、足しげくメーカーを尋ね、改良を申し入れたし、教えも乞うた。府県の農家には馴染みの少ない北海道を含め全国の作業機メーカー話ができるのも、その当時の付き合いが始まっている。当時の営業マンが、今、各メーカーの役員になっているからだ。だから、農機業界の話題や新製品開発状況についても石川さんは地獄耳を持っている。

実践から学んだ科学

やがて、ゴボウの空掘り、リフタープラウでの収穫、といった専用機を使つての作業請負の仕事が増えてくると、兼業も大変になり専業になった。もともと兼業時代から貸耕屋さんとしてもすでに一流だった。一時は一日に何十人というア

ルバイトを使つてゴボウの空掘りや収穫を請け負つていた時代もあった。

機械への投資もさらに進めた。150馬力のトラクタを入れメーカーに石川さん専用の4連ロータリトレンチャーを特注するようにもなった。北海道から中古のポテトハーベスタやポテトプランタも自分でトラックで運んできて、バレイシヨの請負作業もした。

しかしいざプロの貸耕屋となり、沢山の農家をお客にするようになると、農家の野菜作りが気になってきた。反当10袋も肥料を撒いて100gにもならないニンジンを作れない人もいれば、2袋も使わないで300gのニンジンを作る人もある。収量も倍以上違う。見ていてそれでは農家は損すると思つた。下手なゴボウ作りは機械を使うのにも困りものだった。

その時代は、石川さんにとつて、作物栽培、肥料と施肥の科学、そして土や自然を学ぶ時期だった。誰かに教えて貰うわけではない。でも、沢山の農家を回つていればこの人のやり方に学ぼうと思わせる先生もいたし、反面教師もいた。わざわざ、自分の撒いた肥料とは別の肥料袋をこれ見よがしに畑に置いている人もいた。それが百姓根性なんだと思つた。

堆肥の作り方にしても、色々だった。普通だと堆肥を作つた場所や堆肥から流れ出した液のかかった所には草も生えない。堆肥に触れば手も荒れる。なぜだろうと考えた。しかし、全く違う堆肥を作る人がいた。その人は、肥料分のない山草だけを刈つてきて、混

ぜるのはリン酸だけだと教えてくれた。その人の堆肥はいくら触つても手が荒れなかったし、ミミズや虫もいなかった。そして、その人は何でもうまく作つていた。やがて、堆肥を作れば塩素も出るし硫加水素だつて出ているのが分かった。ミミズがいる場所では酪酸発酵が進みアルカリ化するなんてことも知つた。

堆肥を入れたら、かえつて具合の悪くなる場合があることも知つた。堆肥を入れた畑でバレイシヨのソウカ病が出るのも堆肥に由来する土壌のアルカリ化のためだと分かつてきた。

何がなんでも有機栽培だ、堆肥だと、信仰の様に信じて疑わない人が、案外ろくな作物を作つていないのも見た。酸性土壌で作るもの、アルカリで良く育つもの、作物によつてどんな土を好むのかも分かつてきたし、作物の相性というものも見えてきた。すると、生えてる雑草、ミミズなどがいるかいないかを見れば何をその畑で栽培すべきかも分かつてきた。

深耕ロータリとプラウを使つての肥料の効き方も見つめてみた。深耕ロータリを使つた畑は上から下まで土がフワフワになつてしまふ。そうなると肥料が抜けしてしまう。雨が降ると逆に締まりすぎてしまふ。プラウをかけるだけだと同じだが、その後を踏み締めれば少ない肥料ですむ。これは砕土と鎮圧による土壌水分の大小によつて土の電気の強弱も違つてくるためだった。だから鎮圧すれば水分が保持でき、少ない肥料ですむのだと理解した。

実践で見たことを本に当たつてみる



石川さんはJCBのトラクタに注目している。その高馬力だけでなく、時速60kmで走れる高速移動能力にである。業者は北海道の酪農家をお客だと思っているが、府県の請負いをする人や、各地に出作りしている野菜農家ほどそれが必要なのだ。微速装置が付けば石川さんは購入したいといっている（石川さんの圃場で4連のトレンチャー作業）



石川さん特注のゴボウ選別装置の前で

と、理屈の紐が解けた。肥料の本を読んだら、肥料成分は十一のイオンを持つていてと書いてある。肥料も電気と同じに考えればよいのなら昔の勉強が活かせると思った。

石川さんの機械の知識、土壌肥料の知識は誰かに教わったものではない。すべて実践から始まったものだ。そして実践があると本を読んでもスルスルと理解できた。

苦勞したなんて記憶はない

賃耕に回りながら沢山の人、沢山の土を見ることで、理解はさらに早まった。単に習慣だけでやってくる農家の「技術」といわれるものに疑問を感じた。それまでも自分でも少しずつ栽培を始めていた。でも、学んだ知識を伝えようとして

も、聞く耳を持つ人は少なかった。馬鹿らしくもなってきた。それなら自分で作るうと思つて始めた野菜農家への転換だった。

石川さんは、皆が「連作」ができないといつて悩み、とかく「人の土地を借りまくつて荒していく」と言われるゴボウ作りが専門であるが、石川さんの場合には、8年も連作している畑もある。それも、畑は使うにつれて線虫の障害なども少なくなっていくというのだ。

石川さんは、生えてる雑草を見て畑を借り、ゴボウの連作ができる畑になるまで相性の良い作物を作つて待つことすらある。雑草を見て土壌のphを確認し、ニンジンやパレイシヨを作つてカリを調整したりもする。

そして石川さんは今、力のある農業経営者たちが地域を越えて経営の協力ができないかかと考えている。昨年夏には、本誌の依頼で山形県の生産者のところに石川さんのポテトハーベスターを貸して、その後の出荷にも協力するという関係を持った。茨城と山形で作期の違いを活かし、機械利用の協力をして共同出荷体制を組もうというわけだ。また、高齢者や小規模農家との共同も模索している。高齢者が土地と軽作業の補助労力を提供し、技術や機械を持つていものが作物を作つて回る。さらに、加工メーカーや出荷業者に集荷や調整の協力を求める生産出荷体制が作れないかと考えている。

石川さんは長年野菜作りをしてきて、「今の量販店の野菜に対する取り組みはあまりにも無茶だ。合理化は必要だけど、これでは大きな農家から駄目になつ



石川さんはフォークリフトも特大だ

ていつてしまう。でも、輸入野菜もそれほど心配はないし、安売りの量販店もあれでは続かないよ。作る奴がいなくなつちゃうから。もうすぐ、新しい野菜需要の時代が始まるのだと思うよ。その時までは辛抱だね。不景気になると化粧品が売れるつて知つてる？お母ちゃんがパパートに出るからだつて。何か片方に偏れば新しい傾向が出てくるのだよ。野菜もそうさ」と野菜生産者は今こそが踏張り時だという。

石川さんは、農協職員時代から各地のメーカーをたずね歩いた。特にスガノとは、同社が府県で初めて高崎に営業所を設けた時からの付き合いで、同社が支援する「北海道土を考える会」にも度々参加している。北海道の農家や企業との付き合いもそれがきっかけだった。冬に夫婦で日本全国の農家を尋ね歩いたこともあった。名前の知れた人、車で走つてこ

れはと思つた人に話し掛けた。

農家なら、一生、村から出ないでも暮らしていけないわけではない。沢山の出作りをする人が、自分の土や栽培を突き放して考えることができるように、石川さんは自らの面白がりの精神と、他所の人、異業種の人々との交流の中でこそ、自分を見つめ、石川治男という人物とその仕事を自ら育ててきたのではないだろうか。

若い時の苦勞は買つてでもしろといふ。でも、石川さんに限らず、やつてきた大人にはそのことが少しも苦勞であつたとは思つていないものだ。なぜなら、やりたいからやつているのだから。自分の人生、誰に頼まれてやつているわけではない。嫌ならサッサと辞めるべきなのだ。むしろ苦勞を買うことのできる身分の幸せこそを感じるべきなのだ。

仕事は、ただ作業の対価として得る労賃を貰つていただけだとしたら、それは切ないことではないか。ましてや借金までして百姓仕事をやるなんて。むしろ、そこでの収入の大きさより自分にとっての意味こそを考えることのできる人間、何よりも自ら何かを面白がれる人間だけに次のステージが用意されるのだ。

石川さんはお金に魅力を感じなかったわけではない。でもそれは結果だった。石川さんはいふ。

「損得だけなら、あんなには頑張れなかったよ。やつたのは面白かったから。それに、その時のお金だけを見ていたら、未来が見えなくなり、変化に取り残されてしまう」と。

(昆 吉則)